

2020年5月27日  
太平洋工業株式会社

## 2020年3月期 決算説明会 質疑応答要旨

Q：コロナ影響で20年度はかなり厳しい業績見通しと思うが、現時点での大まかな方向性について、開示可能な範囲で教えてほしい。

A：プレス事業はトヨタ生産台数に比例する。バルブ事業は世界の自動車生産台数やアフターマーケットの販売数量が影響するが、Tier2 事業ということもあり、プレスと比べると、コロナの減産影響は遅く出てくる。

Q：今回のコロナ危機と2009年の金融危機を比較すると違いは何か？

A：リーマンショックとの違いは、今の方がよりグローバルに展開していることがある。当時、海外売上は少なかったが、今は50%以上となっており、海外での対策を確実に実施することが課題となっている。また、前回は経済的な危機であったが、今回は人命の課題であり、一旦需要が戻っても、生産体制がすぐに整わない可能性もある。感染があればまた大きな課題になるため、コロナ対策を徹底的に実施する必要があることが大きな違いである。

Q：海外拠点が増えており、コスト負担も増えていると思うが、金融危機以上の影響がコスト面で行くか？

A：各国や会社の動向を見極め、今精査している。

Q：TPMSについて、中国搭載も進んできているなか、コロナ影響もあり環境は厳しくなっていると思うが、見通しを話せることがあれば教えてほしい。

A：今はトヨタ、日産、スバル、ヒュンダイと取引している。今後も各社の立上げ車型について、機会を逃さず確実に受注していくことと、新製品の開発を進めることに取り組んでいる。

Q：TPMSの中国での見通しについて、トヨタは中国減産後、回復スピードは速いようだ。中国のTPMSは期待しているのか、それとも量産のボリュームが大きいので、サプライチェーン含めて回復の心配はあるか？

A：トヨタの中国回復状況は4月以降ほぼフル生産となっており、コロナ前に戻っている。当社も日本からの部品供給も含めフル生産している。販売量も増加していくと考えており期待しているが、年間で考えると2月の生産が停止していたため、その影響はある。

Q：キャッシュマネジメントについて、生産台数が落ち込むので投資を止める案件も出てくると思うが、投資水準や費用抑制の考え方を教えてほしい。また、配当の考え方、コミットメントラインの規模、現預

金の水準について解説してほしい。

A：設備投資については19年度がピークであった。投資の内容は既に着工しているものが多く、全てを止めることはできないが、これから着手する案件は大きく見直しており、19年度比2割程度は減らせると考えている。配当は現在見通しができないため、公表できる段階になったら説明したい。資金は20年3月末で現預金残高180億となっている。コロナの影響で資金需要も高い。コミットメントラインは60億を設定している。他に短期の貸付枠も持っており、合わせて資金需要に対処する。

Q：シュレーダーとのシナジーについて投資内容と効果を教えてください。

A：シュレーダーは当社が買収した会社で、アメリカとフランスに拠点がある。シナジー活動として、まず即効性のある生産現場の改善に取り組んでいる。例えば、製造現場で設備の多台持ちをすることによって、製造現場の省人を図ることや、今まで外注化していた製品を設備投資することで内製化を進めるなど実施している。また、生産現場だけでなく、販売や開発を含めて、シナジー活動を進めている。シナジー活動を進める中で気を付けているのは、一方的に日本側から物事を押し付けるのではなく、現地のメンバーのやりたいことを尊重しながら、意思決定を早くして、シナジー効果を最大化できるようにすることである。

19年度は利益面でおおよそ1.5億円程度のシナジー効果を上げることができた。20年以降は、生産数量の状況にもよるが、その倍近くのシナジー効果、利益を上げられるように進めている。

Q：トヨタが生産数のガイドラインとして生産台数の目安を出しているが、どのような業績になるかイメージを教えてください。また、コロナ対策として生産時に人の間隔を空けるなど、生産のコストも追加でかかると思うが、限界利益率に変化はあるか？

A：業績については現時点で見えていない部分も多く、変動も多いため、公表ができる段階になった時点で説明したい。生産現場でのコロナ対策については、できるだけ生産の標準作業を崩さないように対策している。限界利益率は堅持したい。

Q：プレスの事業領域拡大について、従来OEMがやっていた、プレスの前工程である設計や、後工程である中規模アッシーにまで広がるという流れがあると理解しているが、御社にとっても同じ流れか？また、今回のコロナ影響で、この流れに変化はあるか？

A：顧客の情報提供を受けながらボデー構造解析に取り組んでおり、当社の体制については顧客の評価もいただいている。コロナ禍でも止めることなく進めている。より前工程の仕事をしていくと同時にボデーの軽量化、超ハイテンの拡大、アルミプレスなどで、お客様の車づくりに貢献していく流れは変わらない。

以上